



“優良ベーカリーチェーン” 代表失踪により突然の倒産

首都圏を中心に展開していたベーカリーチェーン「ベルベ」（神奈川県大和市）は、昨年11月に事業を停止しました。突然の代表失踪をきっかけに事態が急変し、倒産後に明らかとなったのは「簿価5倍にのぼる粉飾決算」の疑い。多くのファンに愛された“優良ベーカリーチェーン”にいったい何が起きたのでしょうか。

県内上位の売上高を誇る人気ベーカリー

ベルベの創業は1973年。「手作り製法にこだわり妥協しない」をモットーに、各店舗で手間暇をかけた手づくりのパンを特徴としていました。都内のビジネス街や商業施設内に店舗を構え、東京、神奈川、静岡に計28店舗を展開。2020年6月期の年売上高は約25億6000万円（会社公表値）を計上し、県内上位の売上高を誇るなど、コロナ禍をものともせず拡大基調を続ける「優良企業」と見られていました。

優良企業から一転、突然の全店閉店と倒産

事態が急変したのは11月2日のこと。前日まで連絡を取れていた代表（当時）が会社関係者も含め、連絡難に陥ったのです。直前の10月下旬には借入金の返済遅延、取引先に対する支払遅延も判明。残された役員が中心となり社外対応に当たったものの、それまで経理面は代表が一手に引き受けていたこともあり、状況は刻一刻と悪化し、翌週月曜の8日に全店舗を閉鎖のうえ、事業継続断念に追い込まれました。

そして、直後に弁護士から送付された受任通知書の一文は、関係者に大きな衝撃を与えるものでした。「現段階では約52億円の負債を抱え、約定どおりの弁済が不可能となり、今後の事業の継続も困難な状況」一。直前まで「優良企業」だった会社が突然倒産したうえ、関係先に提出していた決算書の負債額（＝約10億円）とあまりにかけ離れていたからです。

膨らんだ負債、謎は多く残されたまま

簿価の5倍にのぼる粉飾決算の手口は、現時点で判明していません。おそらく借入金の多くを帳簿外に隠し、その分を売上高に過大計上していたのでしょう。詳細は弁護士による債権・債務の調査結果を待つほかありませんが、決算書を見るプロフェッショナルである金融機関の大半が異変に気づけなかった事実は重いといえます。「関係先ごとに複数の決算書を提出していたようです。問題のある融資先との認識もなく、使い古された手法が見破れませんでした」（取引金融機関）。

経営全般を掌握していた代表が不在のいま、真相は藪の中ですが、「身の丈を超えた出店攻勢」と「古典的な粉飾手法」の破綻によりベルベは行き詰まりました。新型コロナウイルスの感染拡大と原材料高という「外部環境の急変」も影響したのかもしれませんが。多くのファンに愛された“優良ベーカリーチェーン”は、こうして事業継続の道を絶たれました。 ▲

ないとう おさむ 2000年に株式会社帝国データバンク入社。本社情報部、産業調査部、東京支社情報部を経て2018年10月より現職。入社以来一貫して、倒産企業の取材、倒産動向のマクロ分析を手がける。専門は倒産動向分析、企業再生研究。